
召還と亞久利須

ringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召還と亞久利須

【Nコード】

N6898J

【作者名】

ringo

【あらすじ】

亞久利須の学校。

それは、普通の学校ではない。ただ認めてられるのは、自分たちが持っている「能力」だけだった。

一話 プロローグ

ここの、学校はシステムが変わっている。

普通は、勉強だが、この学校は勉強なんて関係ない。

ただ、唯一

学校では、能力だけが許可されている。

幼児から、入れる事になっている。

クラスは、一番良いクラスが、最亜久利須（さい。あくりす）

そして、二番目にいいのが、中亜久利須。（ちゅう。あくりす）

そして、一番駄目なのが 悪亜久利須。（あく・あくりす）

そして、亜久利須の意味は、この学校では、

能力を解放する時に、必ず「亜久利須」と言うのであって、クラスも亜久利須と分かれている。

それが亜久利須の決まりである。

そして、ここに2人の人が立ち上がる。

一話 プロローグ（後書き）

見て下さりありがとうございます★！

亞久利須の決まりは、ま。なんとなくは、分かったでしょうか？

次回は、さらに詳しく載せるので、よろしくです。

二話 ー転校生ー

そして、2月7日。

2人の人が今日、亞久利須の学校に転校してきた。

二話 ー転校生ー

「美咲くっッ！。あんた、今日から学校でしょう。早く起きなさい！！！」

その少女の名は、天野 美咲 （あまの・みさき）

今日から、中学生になるのだったが、その初日に、遅刻。

20分遅刻だった。そして、美咲は、すぐに時計を見て、

すぐに、準備をして急いで、学校に向かったが、当然美咲は、遅刻。

初日なのに…。

そして、学校についた。

「すみません。遅れました。天野・美咲です。」

そう言って、美咲は、教室に入った。

でも、みんなの視線がすごく恐ろしかった。

でも、美咲のクラスは、最初なので、悪・亜久利須。

そのクラスのメンバーは、子供もいた。

その時、もう一人、来た。

「遅れて、すみません。俺、新見 健（あらみ・けん）です。」

男の子が来た。もちろん、私とその男は、遅刻をしていて、未だ教室にたっていた。

「おいおい。授業が遅れる。2人はあいている席を座れ。」

そう先生が言って、2人は、隣同士になってしまい。

美咲にとっては、もう最悪状態だった。

（一番低いランクで、隣は男子。もう信じられない〜）

そう美咲は、座りながら思った。

「お隣同士。よろしく」

隣の健っていう奴は、私にVサインをして気軽にあいさつをする。

私はこんな奴が苦手。なので言葉では、話さないでうなずいた。

（出来れば、関わりたくないタイプ…。）

そう美咲は、思った。

「俺、健よろしくな。」

こいつは、のんきに自己紹介。

当然もう、授業は進んでいる。

私は、コイツを無視して、授業に集中している。

「えっと。ここで問題です。火は、何に弱いでしょうか…。
それじゃ、美咲さん。答えて。」

先生がいきなり、私当てて、何も聞いていなかった私は、
もうパニック状態だった。

そして、健と目があってしまい。

健がノートに何かを書いているようだったが、

今は、それどころじゃない。

（もおっ…なんだっけ…??）

そう思いながらも、健のノートをチラ見をした。

そしたら、健のノートに答えが書いてあり、私は、思わずそれと言
ってしまった。

「水。」

そう言ってしまった。

（も～～何やってんだろ！！。人の答えを見るなんて、私最低だッ
！！）

そう後悔した

「はい。正解です。それじゃ、美咲さん、座って良し。」

そう先生が言って、私は、座った。

（こんな感じじゃ…。健の方も見れない…顔も合わしたくない）

そう美咲は、思った。

「さっきは、ピンチだったネ。俺が居なかったら、君はもう終わっていた。そうでしょ？」

健がまたまた、Vサインをして、気軽に話しかけてくる

（アレ…な…ん…で…。怒っていない??）

私は、そう思った。

「ありがとう。」

私は、そう言って、ピンチは、逃れた。

(なんか、コイツ良い奴かも?)

∴

そう思った。

「そう、言えば…。このクラスはまだ実力を試していなかったわね。そうね…。明日から、みんなの実力を試すわ。ある、チームを作ってもらい。

ま。そのチームは、私が決めるわ。そのチームの代表者がクジを弾いてもらって、

それで、行く場所が決まるの。

一つ目は、 成城の城

2つ目は ゾンビの町

そして、最後が 死の森

この三つに分かれていってもらい、ゴールが最後にあるから、

そこまで、行けたチームは、中・亜久利須に進級よし。

もし、行けないで、死んでしまっても

困るから、不安なチームは、私たち。教師がついて行くわ。

ちなみに、どのコースが一番危ないかわ、自分たちで試して来なさい。

いいわね？」

それは、急な事だった。

私は、まだ試して事も無い、力を急に使えなど…。

そんなの無理…。絶対に無理。

そう決心だけは、していた。

でも、進級したい。だから、私は行く事に決めた。

二話 ー転校生ー（後書き）

見て下さりありがとうございます。

光栄です。二話 ー転校生ー

いかがでしょうか？。

次回も、よかったら見て下さい。

三話 ー試力ー

もおたのしみに〜

三話 ー試力ー

みんなの実力を試すって…。

転校してきて、いきなり実力!??

ありえない!! ツツツツ。ぜつつつたいに、ありえない。

2月8日

また、いつもの通りに学校始まる。

(今日は、チーム決めかあ…。)

私がいつもの通りに学校へ行く道を歩いていると、

だれかが話しかけてきた。

「美咲くくく。オハヨ」

見たことが無い女の子が話しかけてきた。

(初対面なのに、いきなり呼び捨て???)

私は、そう思った。

「あ。あのさ、誰デスカ??」

美咲がそう言った。

「ア…。アタシ??。アタシは、仁美友ひとみになって!!」

仁美が元気よく、言った。

そして、美咲は、すごく困った表情をした。

そして、美咲がこうゆった。

「分かりましたけど…。早く学校に行かない??。ってか、もう先に行ってるね。」

そう美咲は、言って先に歩き出した

「待ってよ～～～～。美咲いいちゃん。呼び捨てにしないから、待って～～～～」

そう言った。

ー学校ー

「みなさんおはようございます。」

先生がそう言って、みんなが挨拶して、授業が始まる。

「今日は、みんなの力を試すためにある場所に行ってもらいます。っていう話は、前にしたわよね?。それで、グループなんだけど、

先生が決めといたから。ちなみに、チームは三人で行ってもらおう。その三人もちゃんと、分けてあるから、安心して。もし心配だったら、先生もついて行くけど…。まあ、チームを発表するわね。」

そう、先生が言って私は、ただ聞く事しか出来なかった。

今更、嫌だって言っても……迷惑かけるだけだし。

さっきだって私が迷惑かけたし…。

「じゃあ、言うわね。一番 「美咲・健・利美香。」

ちなみに、利美香は元、最・亜久利須の学級だから、心配は無いと思うわ。」

先生がそう言った。

しかも美咲が一番。予想もしていなかった。

健とも一緒だし…利美香って子は、最・亜久利須だったんでしょう???

そんな人達と行くなんて…。

「じゃあ、代表して利美香。どこに行く??？」

先生が利美香を呼んで、利美香はすぐにこう答えた…。

(安全な場所がいい!!)

ただ美咲は、そう願う事しか出来なかった。

「死の森で。」

利美香が直行の言った。

美咲は、あきらめた…。

（無理だ！！…。あきらかに、ヤバソウナ場所なのに…。一番行きたくない場所だったのに。）

そう美咲は、心の中で言った。

「分かった。利美香、あんたは一回行った事があるから分かるよね？。どんなに恐ろしい所か…。」

先生がそう言って、利美香はうなずいた。

「じゃあ、三人。私がワープで連れて行くから。」

と先生が言った。

「三人を死の森へ！！…。ワープ」

何かの光が私たちを包んでいった。

気づいたら、嫌な感じの森だった。

やっぱり私たちは来てしまった。

死の森に・・・。

「なんなんだよ！！。気味悪いじゃないか！！。」

健が利美香にいいつける用に言った。

「うるさい…。黙れ。じゃあ、報告しとこう。お前の後ろに魔物がいるぞ。」

利美香が冷静に言った。

でも、健は冗談だと思い。信じなかった。

「へっ！！。いるわけねーだろ？？。冷静に言うなよ。」

と健は言っているが、私には見えた。

健の後ろに、大きな魔物が居る事を。

すぐ止めなくては。と思い、私がすぐに教える。

「健！！。後ろ　！！。魔物がいる。」

と言おうとしたが、魔物を健のすぐ後ろにいた。

もうやられる。そう思った時。

何かが光りだした。

「氷の亞久利須よ。私に力を貸せ！！。」

そう利美香が言うと、氷の刃が魔物に突き刺さり、

魔物は、倒れて、消えて行った。

「だから言っただろ。死の森を甘く見るな。」

そう利美香が言って、先に歩き出した。

「強い…。死の森って本当に恐ろしい所だったんだ…。」

美咲がそう言って、

分かったように見えたが、実はどこかで甘く見ていた。

甘く見ていたら…死。

それが、死の森。

続く

三話 ー試力ー（後書き）

見て下さりありがとうございます。

普通の風邪をひいてました。っていうっても、まだうつすらひいてます。

ま。前からこ小説は、出来上がっていたので、投稿するだけでよかったので

楽っていうば楽でしたあー！

それでは、このへんで…。次回もお楽しみにー

四話 ー無能ー

なぜ、私たちはここに来たのだろうか？？

何かを探しに…？？。

分からない。

いきなり実力を試すとか…。

いきなり、こんな場所に来たりとか。

先生たちは、私たちに何をすれ。っていうの？。

分からない。

なぜここに來てるのか。

今更考えるのも、おかしいけど…

「おい。美咲、何、ぼーっとしてんの？」

利美香が美咲に気づき、声をかけた。そして、健も止まった。

「あ。なんでもありません。すみません…。先に行きましょう！！」

美咲が言って、美咲が歩き出す。

それにみんながついて行く。

（あいつ…。何か考えていたのか…。）

…

…

（駄目だ！！。私の考えでみんなに迷惑かけちゃう…。忘れない…。でも、忘れられない…。）

どうしよう？…。だからと言ってみんなにも相談出来ないし…。）

美咲が心の中で思う。

「おい！！。敵だ！ツツ！！みんな構えろ！！！！ツツ！」

それは、いつも戦っているとか何かが違った。

大きさは、今までの二倍…。ぐらい。

しかも竜だから攻撃は、難しい…。

「美咲の方に行ったぞ！！！！。美咲、攻撃…」

と利美香が言った時…。美咲は、人の話も聞いていないでただ違う事を考えていた。

「竜なんて知らない…。このままではやられる!!。2人ともそう思った時、

竜からの攻撃が来てしまった。そして、美咲に当たる直後…。

「危ねえ!!」

そう、いきなり健が入り込んできて、美咲の目の前に来た。

守ろう…そう思ったのだが、もう無理だった。

健は、そのまま竜の攻撃を受け、そのまま倒れた。

そしてやっと何が起きていたのか、美咲は分かった。

「健!!…!!。な…なっ…なんで!!。な…なんで…。いやー
—————!!…ツツ!」

美咲が悲しみとあふれ…悲鳴をあげた。

「健!!…!!。しっかりしろ!!。今回復する…。精霊の亞久利須よ!!。
私に力を貸せ!!。私に力を貸せ!!。」

いけ!!。「小鈴」

そう精霊の名を言って、光に包まれ精霊は、登場した。

「任せて!!。利美香。私の力!!。ナース!!。」

そう精霊の小鈴は、言って健を黄色と緑が混ざった光に包まれ、無事に回復した。

そして、健は無事に助かった。

そして、美咲の方は怖くて震えていた。

「美咲!!!!」

利美香は怒って美咲を呼んだ。

そして、美咲はこっちを振り向いて…

「…わ…。私…。守れなかった…。自分の仲間も…」

そう言おうと、した時…利美香が、

「私が言いたいのは、それじゃない。そんなのお前の問題でしょ？
？。私が言いたいのは、

魔物〔モンスター〕と戦っている時お前は、何を考えて…」

利美香が怒って、言おうとしたとき、健が優しくこうゆった。

「やめろ。利美香。俺は、無事だったんだし。俺がいい。ってゆってんだから、その話は、終わり。で？。美咲さっきの話の続き…を話してごらん。」

健がそう言って、美咲は、続きを話した。

「守れなかったんだ…私。…だから、もう私…何も無理なのかも…
って…思った。」

誰も、守れない…。ただ気づつける人が多くなって行く…

だからね…。私、、最初からこんな場所…。来ちゃいけなかった
んだよ…。

健や利美香…私とチームになった人は、みんな気づついて帰る…。

だからね…私…。ここでやめようと思う…

先生に電話をして…このミッションを…引退しようと思うんだ…。

もう、誰も気づつてたくない…から」

美咲がそう言って、一気に暗い感じになる。

「引退」という言葉にみんなをどれだけ苦しめたのだろうか…。

でもこれしか、方法はない…。もうみんなを苦しめたくない!!…。

私は、足手まといだったから…。

「それで、みんなを守れんのか?…?…。

引退をしてさ…強くなれるのか?…?…。

誰も守れなかったからって…。すぐにやめるものなのかよ!!…ッ…。

。

そんなの・・・ただの自己中じゃないかよ!!・・・。そんなの、なんのためにここにいるんだよ!!・・・。

進級したい・・・そんなじゃないのか!!!!・・・。お前は、すぐに人に相談しないで、

自分ですぐに決めて・・・それで納得いくのかよ!!!!・・・。

わかんねーよ・・・なんのためにお前とここにいるのかがツツ!!!!
「.....」

健が怒って、美咲に言った

そして美咲は泣きながらこう言った。

「私は、自分で決めた道なの・・・。たしかに自己中かもしれない。
でも、私は・・・誰かさん見たく、強くない・・・誰かさん見たく・・・
頼もしくない・・・だから!!!!。・・・私は・・・

・・・

・・・

…

・
・
・
・
・
・
・
・
・

もう駄目なの……。

「ごめんなさい」

美咲のその言葉に込められた意味……

とは。

引退。

そして、美咲は、入ってその場から、離れた……

四話 ー無能ー（後書き）

四話、ご覧いただきありがとうございます。

まだ、風邪が治っていませんが、体は元気でございますので、

投稿♪。いたしました。せきがですね…もうひどくて…学校もたくさん休んでいるんですよ…。

けっこうつらいです。

四話ですね…うーん。微妙かな??。自分的には、いいカナ?って思うのですが…どうですかね??。

難しいですよ…。こう直せとか言われても、どう直せばいいかわからない時があるんですよ…（笑）

んで、結局直さない場合が…。悪い人ですよね（自分）…

分からないんですよ（馬鹿なもので…）

ま。手軽に簡単に直せる感想をお願いします!!。

もち、難しくても頑張りますので、見守って下さい!!。お願いですう…!!。

それでは、長文すみません。次回もお楽しみにー

五話 ー絶望ー (前書き)

みんな…ごめんなさい。

五話 ー絶望ー

もう無理だ……。私は、みんなに迷惑かける事しか出来ない……。

だから、もうこのミッションは私にとっては失敗。だから引退^{やめる}事にする。

それしか方法が無い。健や利美香……最後の最後まだみんなに迷惑をかけてしまった。

いや、まだ良い事なんて起きていないのかもしれない。

でも私は決意した。……

さようなら……健。利美香

ごめんなさい。

そう思い、私は急いで走って行った。

「はぁー」

美咲はため息をついた。このため息にはどんな思いが込められていたのだろうか？。

今までの失敗。それからこれからの行き先……。まずは先生に電話を

しなきゃ。と思い、

携帯電話を取り出した。

「プルップルッ」

電話がなっている

なかなか繋がらない。

そして、

「はい。もしもし先生だけど？」

先生は先生だった。

「あ。あの、私美咲ですけど…。このミッションを…やっぱり、その、あ
えっと…あのですね…？」

美咲は、はっきりしなかった。

せんせいは、はっきりしないのが嫌い、いつもそう言っていた。

「はっきりしてくれるかしら。やめるの…？？。あ。そう。やめる
のね。分かった。

それでいいんじゃない？。先生にとっちゃ、そんな話どーでもいい
けど。はい？？、

黙っていないで、何か言わないと切るよ?? (電話)。まああ?、ちゃんとミッションを成功した者には、上がれるんですけど…ネエ…??。あなたの決心なら、どーでもいいけどね?

分かる?? 話の意味。

「やめたいのなら、やめれ!!! って事よ?。先生は、あなたがやめるとかやめないとか、

別にどおーでもいいものだし?。早く物語り進め的な…感じで、待っている方も居るだろうし (何言っちゃってんの??)」

先生は、はつきりと言った。

「分からないんです…。やめたくないっていう心もあるし、でもまた誰かを気づつける。んです。だから…私、どうしたらいいのか…。分からないんです。」

美咲は、先生に相談に乗り…

「じゃあ…。」

と話を進めようとした時… 電話が切れた

「きややや!!!!!!」

美咲が突然悲鳴を上げて、投げ飛ばされた。

その時その声は、健たちの所にも聞こえた。

「なあ、なんか声聞こえなかった？」

健が利美香に言った。

「聞こえなかった。ま。気にするな。」

といつもと変わらない利美香。

その時美咲は、魔物と戦う所だった。

「モンスターデーター」

名前 ガクノリス・マイジャク

レベル 67

弱点 炎の魔術

美咲は、強い敵なんて知らなかった。

だいたい突然来て、びっくりしている。

「いったああ！！。…って敵デカ！！！！！！ッッ。私もやらなきや！！」

私の亜久利須！。行け！。炎よ！。あいつを倒して！」

と攻撃。

でも弱いのか、全く効かない。

いや、相手が無効にしていたからだった。

こんな強い敵…一人じゃ…無理!!!!。

健や利美香たちがいたら…うん。何考えてんだろ!!私…

あいつらの事なんて…どーでもいいのに…。

でも…なんだろう。

あの人たちが居ないと…なにも…出来ない気がする。

…。

もう無理だ…。

負けちゃう…。

助けて!!健・利美香!!!!

五話 ー絶望ー（後書き）

はい！！。見てくれてありがとうございました！。
んで投稿遅くなりすみませんでした。

風邪をひいてしまって…今は、無事に治りました！！。

ええっ！、物語…ですね…。

一人じゃ何も出来ない…って事が書いてありましたけど、その通り
なんですよね。

ま。次回もお楽しみに！

六話 ー何も出来ない現実ー

もう・・・負けちゃう・・・。

やっぱり一人じゃ何も出来ない・・・。

お願い!!。助けて・・・健・利美香。

でも、ここで助けを呼んだら・・・また、馬鹿にされる。

（お前・・・。助けてもらうために呼んだのか？。馬鹿じゃねーの。
）

（いつでも・・・利美香は、あんたを助けられる訳じゃない。だいたい今更、仲間か？。逃げたのは、あんたなのに!!。）

2人の悪い想像ばかり・・・考えてしまう。

その間に敵は、どんどん美咲の方に近づいてくる。

（やっぱり・・・みんなに頼ってられない。自分で、片付けなくちや!!。いけない!!。）

そう思い・・・美咲は、走り出した。

「私の亞久利須 よ!!。力を貸して・・・。」
「影風」!!。」「

そう私は、本気になり…精霊を呼び出した。

精霊は、基本的に人間の言葉が通じるので…精霊は、普通に喋った。

「美咲…。弱気になっちゃ、負けよ!!。分かる??。ま。アタシがいるから負けないよ!!。」

そう精霊は、美咲の方に近づいて言った。

「そうだよね…。私、頑張る!。お願い、影風。魔物〔モンスター〕を倒して!!。」

手加減は、しないでよ?」

美咲は、そう言った。

魔物は、こちらに近づいてくる。

「任せて!!。アタシの魔法!!。」

サイクロン!!!!!!!!!!」

台風よりも強い風が的を襲う。

敵は、それに的中して、敵は、倒れた…。

「やった!!!!。やった。やった!!!!。やったよ!!!
ありがとう。」

影風。」

美咲は、すごく喜んで言った。

「当たり前でしょう…。アタシは、世界一強いんだからッ！」

と言って精霊は、光に浴びて、消えて行った。そう美咲が知らない間に…

「影風…。どうしたの？…。どこ行っただの…？。私の亞久利須よ！
！。出てきて！！」

ともう一回精霊を呼ぼうとするが…。

誰一人出てこない…。

「なっっ…なんで？…？。どうして…言う事聞かないの！！…？…？」

それは、美咲だけでは、無かった。

健・利美香編ー

「おい…利美香。最近の、精霊達の様子、おかしくないか？」

健が歩いている途中に話した。

「やはり、お前もか。私もそう思う。精霊の力も弱まっている。
なかなか持ち主の言う事を聞かない。そうなんだ…。」

利美香は、そう言って、一回…出してみた。

「開け!!!。私の亞久利須!!!!。出てこい。精霊!!!」

利美香がそう言うてが…やはり出てこなかった。

「出てこない…。ってことは、健のもだよな。
って事は、、、」

と言って、利美香は、止まった。

そして

「美咲もだよな。」

「美咲もだよな。」

と2人ではもった。

2人は、、、美咲の事が心配になった…。

もしあいつの身に何かがあると
すれば…。

…

最悪な事しか…（悪い想像）しか思いつかなかった。

「美咲…」

六話 ー何も出来ない現実ー（後書き）

はい！。見てくれた方に感謝しまーす！。

六話…投稿が遅くなり…すみません。

まああ、これからも頑張りますのでよろしくお願いします！

7話 ー命令ー

自分たちが持っている精霊がいきなり出てこなくなった。

それは、美咲一人だけでは、なかった。

みんな…先生や、健・利美香。

そうみんな。

「プルッルッルッル」

っと、美咲の携帯が鳴った。それは、先生からだった。

「あ。はい、もしもし。」

美咲は、電話にすぐ出て…。

今の状況を確認できなかった。

「もしもし、美咲さん。今…あなたが持っている精霊が出てこなくなっているでしょう…？。それ…一回、能力テストをして…また新しく、データを作らないと、駄目になったのよ。だから、三人で一回…学校に戻ってきて。三人が集まったら、また電話して。」

そう先生が言って、電話を切った。

一回…みんなで会わないといけないって事…？。

でもケンカ中だし…。

とにかく電話しなきゃ！！。

「プルルツツルツ」

と美咲が利美香に電話をした。

「あ。美咲からだ。」

と利美香は、すぐに気づき…電話に出た。

「なんだ…？。」

利美香がそう言った。

「あ。そのお…利美香…？。美咲だけど…今精霊が出せなくなって
いるでしょう？。」

それって…先生たちが能力を試して…新しいデータを出さないとい
けないらしいんだ。

それで…三人で集まって、一回学校に戻ってこいと。言ってい
ただけど…。

どうすれば…。」

と美咲は、電話をかけた…。

「なら、お前がこい。」

今私たちは、西の方にいる。来い。以上だ。」

と言って、利美香は電話を切った。

また・・・。

会っちゃう…。

どう話せばいいのか…

分からない。

でも…私、、、、

前に進まなきゃ！！！！。

何も解決しない…。

そっそうだね…。

私は、決意した。何があっても頑張るって…

7話 ー命令ー（後書き）

見て下さりありがとうございました！！！！！。

とても短かったけど…見てくれた方に感謝です！！。

八話 ー利美香&健編ー

頑張らなきゃ!。」

今だけ仲良くすればいいよね?

って思っていた。

利美香・健編

「美咲…。遅いな。」

と利美香が声をかけた。

「ああ。確かに…。」

と健が言った。その言った直後

後ろから何か音が聞こえた。

「なっっ…:なんか、音が聞こえないか?」

と健が言った。

「何か…聞こえる。だんだん…近づいてくる。」

と言った時、何者かは私たちの目の前に現れた。

「見いいつけた〜〜？？アリカの敵〜〜？？」

と現れたのは中学生ぐらいの女の子だった。

黒い服に身長は154センチぐらい。

杖を持って現れた。

「何者だ！！！」

と利美香がすぐに気づき急いで声をかけた。

「あ。アリカ？。アリカは世界一、可愛くて強い女の子だよ〜ん？」

と馴れ馴れしい挨拶をしてくる。

「で？世界一可愛い？？？。どこが？。そんなブサイクでぶりっ子の奴が可愛い訳ないだろ！！！！」

と利美香は反撃をする。

利美香もなかなか手強い。はっきり言うタイプだからだ。

「何言っちゃってんの？オバサン！。オバサンには可愛さが分からないんだよ！！！」

アリカの可愛さなんてババアに分かるものか！！！！！！」

といきなり態度が変わり、さっきの言い方などはなかったかのよう
に…。

「はあ？。そんな言葉使いが悪い奴なんかに、そんな気取ってんじやねーよ！！！」

と利美香は反撃しまくり。
ただ健は見ているだけ。

「女って…めんどくせ。」

と小さな声で言った。

「健！！！！なんか言ったか？」

と利美香がすぐに聞いてきた。

「はい！いえ…何も。」

といちいち口をつっこまれたらめんどくさいので、ここは礼儀正しく。

(あゝ？。そうだ…。これは使えるかも…。確か…今、能力が使えないはずだったわよね？…。アリカ…これでやっちゃおつと？…)

とアリカは心の中
思った。

「ほう…何にも言えなくなったか？」

と利美香は言った。

「あ。はい???そうなんですぅ???. さっきはごめんなさい。んでアリカ：能力が使えなくなっちゃって：でもメンバーとは別れちゃって???魔法学校に行きたいのですが：。」

とアリカが言った。

「あ。それなら俺らと目的同じじゃね?。いいんじゃないか?利美香。一人ぐらい：」

と健が言った。

「ああ。いいが：この女：とか?」

と嫌そうに言った。

「まあまあ。そのうち仲良くなると思うし：。行こう!」

と健が言って：。アリカも一緒に行く事になった。

「あのお???所で自己紹介：してくださいませんか?」

と可愛さアピールをしたアリカ

「あ。俺の名前は、健けんよろしくなっつ」

「私の名は、利美香りみかだ。」

と2人は自己紹介をした
。。

（この健って奴…。私の魔法を使えば！！！！）

「ねええ〜？？健君…。ちょっとこっちに来て。」

とアリカは言った。

「あ。うん」

と返事をした。利美香は…

「健行ってこい。そんな女と話したくない。」

と言った。

そして2人での会話が始まった。

「ねええ〜？？健君…。私さ…少し魔法が使えるかもしれないの…。
見ててくれる？」

とアリカは言った。健はうなずいた。

「私の能力！！。。解放！！！」

（さあ…始めましょうか…悪の魔法を！！！！）

「私の悪の亞久利須よ…。彼奴にやっちゃって！！！」

と魔法が飛び出て行き…。健に魔法がかかった。

「健君く???これで…健君はアリカのもの。」

と言った時、利美香は音に気づきやってきた。

「何をした!!」

と言ったが…アリカは

「ごめんねええく???私最初から魔法が出来るんだよねえく???」

あんたらと違って…悪の魔法が…ネ☆

だ?か?ら。健君に悪の魔法をかけて…・健君はもうアリカの

もの…!。色々と使わせてもらうねく???。でも大事につるから、

でもあんたらが邪魔をしたら…どうなるか分かるよねえ?

死…だからねく???く???く???。ウケルー」

とアリカは言った。

その時…美咲がやってきた。

「りっつ利美香!!」

と美咲が呼んだ。

「美咲。。大変だ・・・健が悪の魔法をかけられて…」

と言った。

「あ…あく??」

と何が起きたのが全く分からない美咲

「ねえ、利美香。あんたがあの時、私に喧嘩を売らなければ…健は無事だったのね??」

あ。そうだ…面白い…利美香をここでつぶしてあげる…。

もし、、、この先、仲間が全員私の言う事を聞いたらどうなるかなあ??

やってあげるネ!!」

とアリカが言って呪文を唱えかけ始めた。

「私の悪よ。利美香以外にやっちゃって!」

と言って…美咲の方に悪の粉がよってきた。

(お願い…みんなを助けて!!!!!!!!!!)

と美咲が心の中で強い意志を持ちながら思った。。

「私の亞久利須よ!!!!!!!!!!。お願い、、、力を貸して!!!!!!!!!!」

！
」

と言って、能力が解放された。

な…なんで？

でも、助けなきゃ！！！！

健…今助けるから！！！！

八話 ー利美香&健編ー（後書き）

投稿が気づいていたら遅くなりすみません。
急いで原稿を書きました。

なんかやな感じの女が出てきましたけど…。

本当は、そんな事考えていなかったのですが…物語がこの先どうしようか。

と思っていきなり登場させました。

あ。これからも宜しくお願いします！

（評価もW）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898j/>

召還と亞久利須

2010年10月9日00時58分発行